



## 紙おむつの需要予測

2004年( H16 ) ~ 2008年( H20 )

日衛連では2004年( H16 )から2008年( H20 )まで、5年間の紙おむつの市場見通しをたてました。今回の市場見通しは、新生児の出生人口の減少、65歳以上の高齢者の増加を背景に、セルフメディケーションの大きな流れをにらみつつ、今後5年間の市場見通しの試算を試みたものです。

一方、今回の市場見通しの作成作業と平行して、新たなマーケットを形成しつつある軽失禁用パッド・ライナーの実態をより正確に統計に反映するために、日衛連の生産数量報告(自主統計)の項目に「軽失禁用パッド・ライナー」の集計項目をあらたに設けることとしました。

市場見通しの背景や、算出の根拠となった数値などを紹介しながら、今後の紙おむつ市場の動向予測についてご紹介します。

### ● 減少する新生児出生数、急増する65歳以上の高齢者

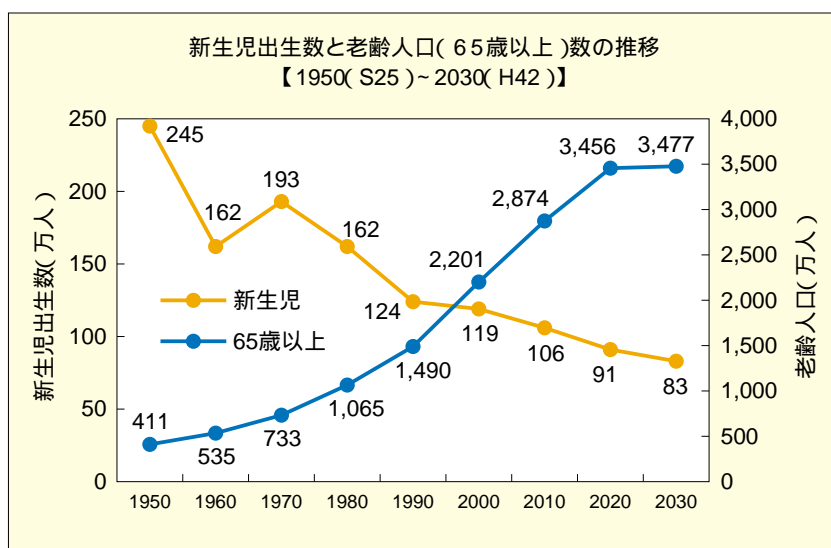
育児と介護にとって、いまや紙おむつは必需品といえる存在になってきています。

しかし、少子高齢化が進行する中で、紙おむつの使用対象となる日本の人口構成は大きく変化しつつあります。

新生児の出生数は1950年( S25 )の245万人から2003年( H15 )は112万人に、さらに2030年( H42 )には83万人にまで減少すると予測されています。

一方、65歳以上の高齢人口は1950年の411万人から2003年には2,430万人と約6倍になり、さらに2030年には2003年比1.4倍の3,477万人に達すると予測されています。

今回、2004年から2008年までの5年間の紙おむつの市場見通しは、このような急激かつ大規模な人口構成の変化という要素を組み込んで行いました。

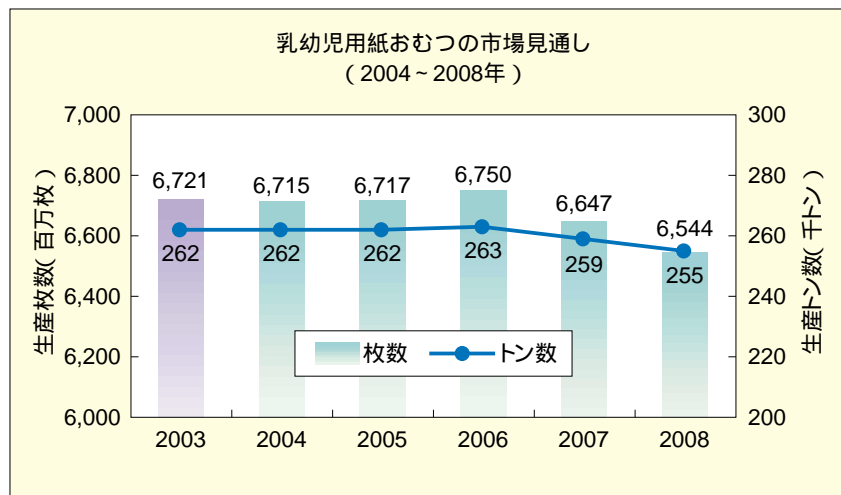
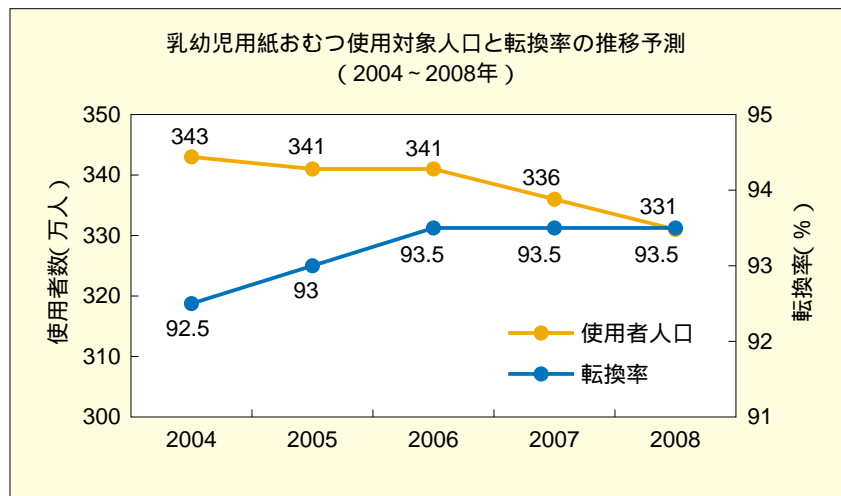


● 4年後には減少に転じる乳幼児用紙おむつ

育児に紙おむつが必需品化していることは、布おむつから紙おむつへの転換率が2003年(H15)で既に92.5%に達していることから明らかです。転換率としてはほぼ上限に達しているものと考えられ、今後5年間の予測でも、1%程度の上昇しか見込めません。

また、乳幼児用紙おむつを使用する対象人口は、2004年(H16)の343万人から、2008年(H20)には331万人と5年間で12万人も減少するものと推計されています。

その結果、乳幼児用紙おむつの市場見通しは、2006年(H18)に転換率の0.5%上昇予測で、一時的に上昇するものの、5年間というスパンでは確実に減少していくと予測しました。



乳幼児用紙おむつの市場見通しデータ

	2003年実績	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
対象人口(千人)	3,446	3,429	3,412	3,410	3,358	3,306
転換率(%)	92.1	92.5	93.0	93.5	93.5	93.5
生産枚数(百万枚)	6,721	6,715	6,717	6,750	6,647	6,544
生産トン数	262,106	261,885	261,963	263,250	259,233	255,216
平均重量(g/枚)	38.9	39.0	39.0	39.0	39.0	39.0
使用枚数(枚/日)	5.8	5.8	5.8	5.8	5.8	5.8

見通し推計条件

- 1) 対象月例：0~36ヵ月
- 2) 対象人口：国立社会保険・人口問題研究所「日本の将来推計人口」(2002年1月発表)の出生数中位推計値を採用。2003年は、2003年1~10月の速報を基礎とした厚生労働省の推計数
- 3) 転換率：生産枚数/(対象人口×使用枚数/日×365日)×100
- 4) 重量/枚：1999~2003年日衛連生産統計に基づき、今後の1枚あたり平均重量を39gと算出
- 5) 使用枚数/日：1999~2003年日衛連生産統計に基づき、今後の1人当たりの使用枚数を5.8枚/日と予測

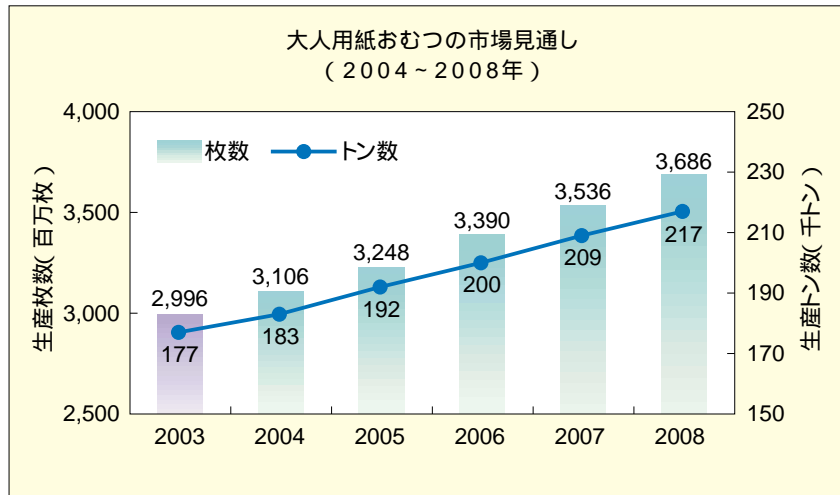
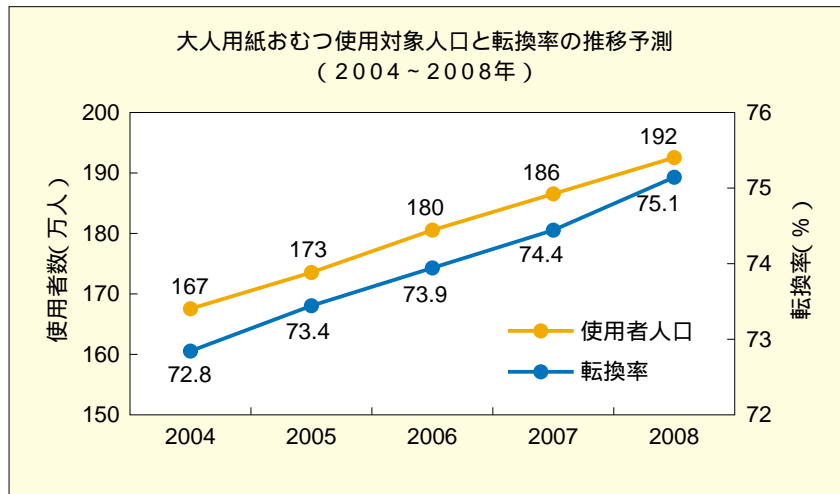
● 対象人口、転換率共に上昇する大人用紙おむつ

65歳以上の高齢人口の急速な増加に伴い、紙おむつを使用する対象人口も、今後さらに増加するものと予測しています。

平成14年・日本医師会委託調査研究では、2004年(H16)から2008年(H20)までの5年間で、在宅・在院の寝たきり老人が25万人増加すると報告しています。

また、布おむつから紙おむつへの転換も今後ますます進み、2004年の転換率73%から、2008年には75%へ上昇すると予測しています。

その結果、大人用紙おむつの生産数量は、2008年には36億8600万枚に達し、対2003年比1.23倍になると予測しました。



大人用紙おむつの市場見通しデータ

	2003年実績	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
対象人口(千人)	1,618	1,670	1,731	1,796	1,860	1,922
転換率(%)	69.0	72.8	73.4	73.9	74.4	75.1
生産枚数(百万枚)	2,996	3,106	3,248	3,390	3,536	3,686
生産トン数	177,295	183,254	191,632	200,010	208,624	217,474
平均重量(g/枚)	59.2	59.0	59.0	59.0	59.0	59.0
使用枚数(枚/日)	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0

見通し推計条件

- 対象人口：平成14年日本医師会委託研究調査研究による在宅・在院の寝たきり老人推計を採用。これに65歳未満で紙おむつを必要とする人20万人を加算。
- 転換率：生産枚数 / (対象人口 × 使用枚数 / 日 × 365日) × 100
- 重量 / 枚：1999～2003年日衛連生産統計に基づき、今後の1枚あたり平均重量を59gと算出。
- 使用枚数 / 日：1999～2003年日衛連生産統計に基づき、今後の1人当たりの使用枚数を7枚 / 日と予測。(内訳はテープ型2枚、フラット型または尿パッド5枚と仮定)

## ● 大人用紙おむつタイプ別見通し

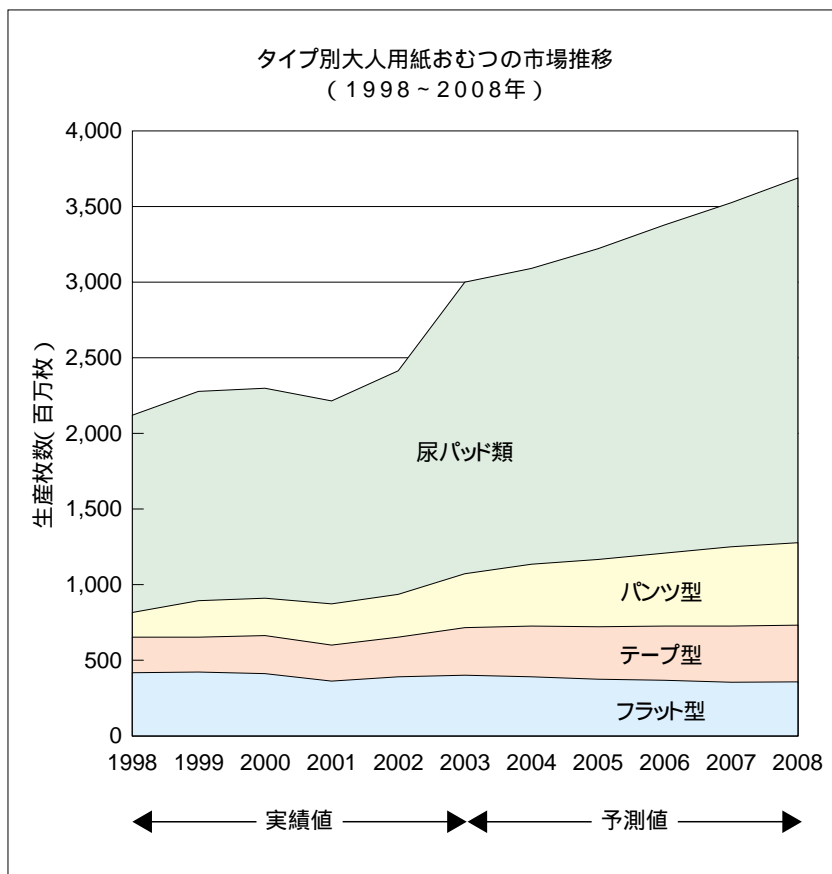
パンツ型、テープ型、尿パッド類が増加

大人用紙おむつの生産数量見通しをタイプ別に行ったのが右のグラフです。

フラット型は1998年(H10)以降も減少あるいは横ばいに推移しており、今後は尿パッド型に転換していくことが考えられることから、今後は減少傾向に転じると予測しました。

テープ型紙おむつは、病院・施設等で布おむつからの転換が進むものと予測されることから、毎年3%程度の増加が続くものと予測しました。

パンツ型については、1998年以降5年間の平均では、年間10%近い伸びを続けてきましたが、今後は伸びが鈍化していくものと予測しています。また、尿パッド類は紙おむつと併用することで、使用枚数の削減、コストダウンにつながることから、今後とも使用量の増加を見込んでおり、対2003年比で25%の増加を予測しています。



## ● 軽失禁用パッド市場の拡大で、日衛連統計の集計項目を改訂

紙おむつと併用して使用する尿パッドの需要が急増していますが、同時に、下着に装着して使用する軽失禁用のパッド・ライナー類の市場が、新たに構築されつつあります。日衛連の会員会社からも相次いで軽失禁パッドやライナーが発売されています。

従来から軽失禁への対応策としては、尿漏れ防止用の下着や、生理用ナプキンでの代用使用が行われてきましたが、下着は洗濯の手間や匂いなどが気になったり、生理用ナプキンは経血吸収用品であり、尿吸収には適していないなどの問題がありました。

軽失禁用パッドは、尿吸収用が開発された製品で、コンパクトで取扱が簡単などの特徴を持っています。

分類上では「紙おむつ」と「その他雑貨」に分類される製品が混在しており、軽失禁パッドあるいはライナーなどの名称で販売されています。

日衛連では「失禁」市場の実態把握という観点に立ち、平成16年1月の紙おむつ自主統計から、「その他パッド型」の項目を、紙おむつと併用使用する「尿とりパッド類」と「軽失禁パッド・軽失禁ライナー」に分けて集計することにしました。